せいかつ探検隊





実践しながら見直そう！

スタートカリキュラム改善ブック



2021 no.1
創刊号

光村図書

実践しながら見直そう!
スタートカリキュラム改善ブック

**期待と不安を胸に新１年生が入学してくる春です。
第３ステージのスタートカリキュラムを理解し，
子どもの意欲を引き出しましょう。**



第3ステージって，どういう意味ですか? 何を目ざせばいいのでしょうか?

「第３ステージ」のスタートカリキュラムは，平成 29 年の学習指導要領の改訂で「第１章　総則」の中にスタートカリキュラムが位置づけられ，全小学校でのスタートカリキュラムの編成・実施が求められたことから始まりました。

その特徴は，「児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること」※1 です。子どもを学校の枠にはめるのではなく，**子どもたちのそれまでの育ちや学びを引き出すという，発想の転換**が先生方に求められます。

子どもたちの「学びに向かう力」がおおいに発揮され，生き生きした子どもの姿が見られる「第３ステージ」のスタートカリキュラムを目ざしていきましょう。



寶來生志子 ほうらい・きしこ

横浜市立池上小学校校長。横浜市の公立小学校勤務ののち，平成24～28年には，横浜市こども青少年局担当課長として，スタートカリキュラム推進を担う。平成29年より現職。同校では，入学してまもない1年生の学校生活の様子を積極的に授業公開するなど，スタートカリキュラムのあり方を全国に発信している。著書に，『育ちと学びを豊かにつなぐ 小学1年 スタートカリキュラム＆活動アイデア』（明治図書出版／共著）などがある。「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 生活編」作成協力者，「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム」（文部科学省・国立教育政策研究所 編著）作成協力者，NHK Eテレ「おばけの学校たんけんだん」「すたあと」の制作協力などにも携わる。

第１ステージ

スタートカリキュラムという言葉が最初に出てきたのは，平成 20 年の『学習指導要領解説　生活編』。学校生活に適応できずに，集団行動がとれないなどの状態が続く子どもたちの現象を，「**小１プロブレム**」と呼び，それを解決するための方策に取り組んだ時期が，「第１ステージ」と位置づけられています。

第２ステージ

「第２ステージ」は，より子どもの生活の流れに沿った取り組みに。平成 27 年に『スタートカリキュラム　スタートブック』※2 が出されると，「**１年生は，ゼロからのスタートではない！**」が合言葉となり，子どもたちは幼児期の遊びや生活を通してたっぷり学んできているという考え方が叫ばれ始めました。

第３ステージへ！



今あるものを，どう変えていけば，第3ステージのスタートカリキュラムになるのでしょうか。

**スタートカリキュラムを変えていくときには，
次の2点を工夫することが大切です。**

point 1 生活科を中心とした合科的・関連的な指導を



園では遊びを中心として総合的に学んでいた子どもたちにとっては，「ここからは生活」「ここからは国語」などと分けるより，一連の活動の中に教科の内容が溶け込んでいる方が学びやすいのです。

例えば，生活科の学校探検で気づいたことなどを，言葉で表現したり友達と伝え合ったりする学習活動の場合，国語科の「伝えたい事柄や相手に応じて，声の大きさや速さなどを工夫すること（A(1)ウ）」について合科的に指導することで，指導の効果を高めることができます。全ての単元を俯瞰（ふかん）できる単元配列表を作成して考えてみるとよいでしょう。



point 2 弾力的な時間割の設定を

入学当初の子どもたちの発達の特性に配慮し，10～15 分程度の短い時間で時間割を構成したり，子どもたちが自分の思いや願いの実現に向けて，ゆったりとした時間の中で活動を進めていけるよう活動時間を設定したりします。

例えば，本校では週案に帯単元で毎日 15 分ずつ「お話ししよう」を設定しています。複数の園から入学してきた子どもたちにとって，一人ひとりの顔と名前と好きなことを知ることができるので，楽しみな活動になっています。



「お話ししよう」の活動を楽しむ子どもたち

※1…小学校学習指導要領解説 総則編　第1章 第2の4の (1)　※2…文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター発行，平成27年1月



スタートカリキュラムを成功させるために，学校全体で取り組むべきことについて教えてください。



入学直後の子どもたちを，どのように見取り，支援していけばよいでしょうか。



step 1 学校全体の共通理解を

スタートカリキュラムを成功させるためには，１年生の担任だけではなく，全教職員で共通理解し，学校全体で取り組むことが大切です。１年生は，小学校生活６年間のスタートでもあり，子どもたちが安心して学校生活をスタートすることは，その後をも大きく支えることになるからです。

本校では，４月当初に全教職員で「スタートカリキュラムミニ研修会」を行い，１年生にどんなふうに関わり，どんな声かけをしてほしいかを伝えています。また，４月最初の朝会では，「１年生は赤ちゃんかな」という題で他学年の子どもたちにも働きかけます。

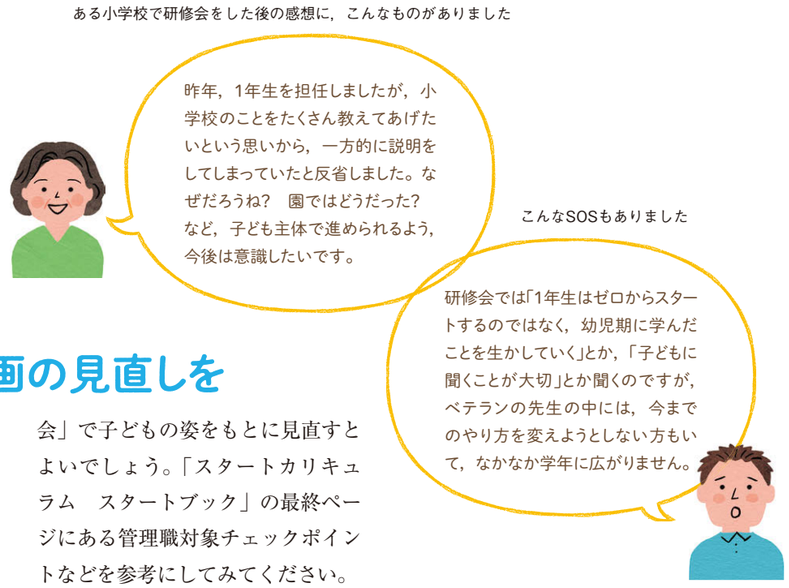
３月までは「なんでもできる年長さん」として園で憧れられていた子どもたちですから，赤ちゃん扱いするのではなく，わからないことをすぐに教えてしまわないことが大切だということを理解してもらいましょう。「どうしてそう思ったの」「どうしたらいいと思う」など，まずは，１年生の思いをきいてほしいことを伝えることで，１年生の視点に立って応援してもらえます。

保護者に対しても，保護者説明会や入学式，１年生の学年便り等で，スタートカリキュラムの意義やねらいを丁寧に伝えることで安心していただけます。



step 2 教師の意識改革を

「指示したことに従う」「姿勢よく行儀よく座って，先生の話を聞く」こんな姿が１年生のあるべき姿だと思っている先生がまだいるかもしれません。管理職の先生からぜひ，「第３ステージ」のスタートカリキュラムの発想の転換についてお話していただければと思います。



step 3 定期的な計画の見直しを

計画を見直すには，毎日の放課後，１週間後，１か月後，夏休み，１月～３月など，時期を捉えて反省，検証，改善するとよいです。管理職も入った「スタートカリキュラム委員会」で子どもの姿をもとに見直すとよいでしょう。「スタートカリキュラム　スタートブック」の最終ページにある管理職対象チェックポイントなどを参考にしてみてください。

ゼロからのスタートじゃない！肯定的な子ども観をもって子どもを支援する

幼稚園教育要領等で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」は，到達目標ではありませんが，ここから，子どもたちが幼児期にたっぷりと遊びを通して学んできていることがわかります。

「子どもは，学ぶ意欲と学ぶ力をもった有能な学び手である」という肯定的な子ども観をもち，共感のまなざしで，そして笑顔で，子どもたちを見ていきましょう。

各校で期待する子どもの姿を設定し，共有する

スタートカリキュラムで期待する子どもの姿を，学校全体で設定し，子どもを見取っていきましょう。

遊びを中心として総合的に学ぶ幼児期の学び方と，自覚的に学ぶ児童期の学び方を行きつ戻りつしながら，子どもが主体的に自己を発揮できるようにする場面を意図的につくるのが，スタートカリキュラムです。１年生の担任は，あれもこれも教えなくちゃと焦ってしまうかもしれませんが，まず先生方が広い心，ゆったりした心で子どもたちと接することが大切です。

期待する子どもの姿（例）

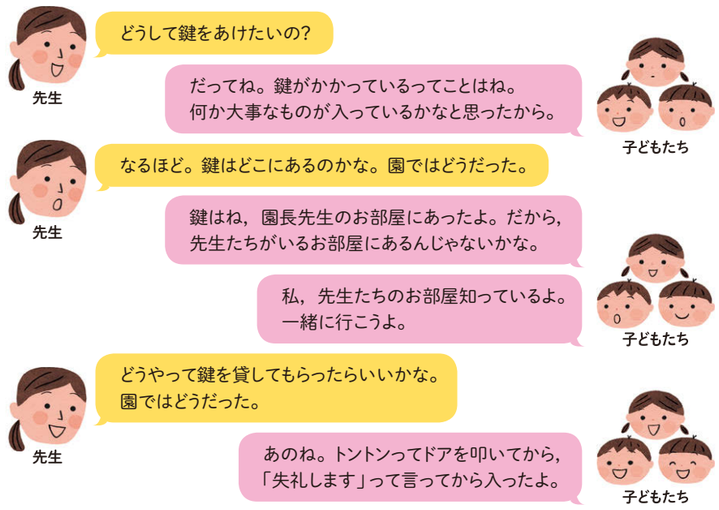
- 安心して自分を発揮できる子ども
- みんなと楽しみながら関わり，好奇心をもつ子ども
- 思いをふくらませ，考えを広げ，学びに夢中になる子ども

子どもの経験を生かし考えを引き出す言葉かけを大切にする

「学校はこれまでの経験を生かせる場所だ」とわかると子どもは安心してどんどん自己発揮できるようになります。それには，子どもに聞くことが欠かせません。

例えば，学校探検。鍵のかかっている部屋を見つけた子どもたちは，鍵をあけてみたいと言い出します。教師がそれに問いかけることによって，子どもたちは自分の経験をどんどん話します。

右のやりとりのように，子どもの発言を待つ，聞く，認めることがとても大切です。





環境面はどのように整えればよいでしょうか。

子どもたちが安心して自己発揮できるように，時間と場所の2つのアプローチで環境を整えましょう。

時間

生活リズムや思考の流れに合った時間割の設定

私の勤める横浜の小学校では，「なかよしタイム」「わくわくタイム」「ぐんぐんタイム」というまとまりを示し，子どもたちの園での生活を参考に自分たちで生活を作っていけるようにしています。

本校では，「なかよしタイム」の前に，「あそびタイム」を設けています。自分で遊びたいものを選んで遊んだり，友達と誘い合って遊んだりして，緊張を和らげ，学校での一日の生活を安心してスタートできるようにするためです。担任にとっては，連絡帳に目を通したり，子どものことをよく見たり関わったりすることができます。ゆったりとした朝の時間が，子どもにも担任にも心の余裕をつくるのです。



「あそびタイム」の様子





時間割の掲示（黒板左側）には，マークを貼って，今，どの時間かを示すようにすると，見通しをもって活動することができます。

場所

みんなにとって学びやすく，過ごしやすい教室の工夫

板書には，視覚に訴える絵や写真を活用し，音声言語や文字言語だけでは内容や指示が十分に理解できない子どもも，迷わず活動できるようにします。

教室の一角には，畳を敷き，絵本コーナーを作ったり，折り紙やおはじき，カルタ，カラーペンなど自分たちで自由に使えるものを置いたりして，自分で選んで遊ぶことができるようにしています。

保育参観や引き継ぎなどで園に行った時には，園ではどのようなコーナーを設けているか見せていただくと教室環境を整えるうえでたいへん参考になります。



絵本コーナー。クールダウンできる場所としても活用することができます。



学校生活のきまりや習慣は，どのように指導すればよいでしょうか。

子どもたちのこれまでの経験を引き出し，学校生活につなげていきましょう。

質問や声かけで，幼児期の経験を引き出して

入学当初は，○○のしかた・使い方など，指導することが多いと思っていませんか。でも，園に通っている子どもたちは，ほとんどのことを経験しています。担任が全部説明するのでなく，子どもたちの経験を引き出しながら学校生活を進めていきましょう。

例えば，給食の場合，園での経験を聞いてみることから始めます。

子どもの不安や心配事を出し合って，そこからつなげていくことで，納得しながら小学校のやり方を理解していくことができるのです。

また，着替えは，お昼寝があった園では，生活の中で毎日行ってきたことです。「どんなふうに着替えていたかな。」と投げかけることで，洋服のたたみ方のコツなども，子どもたちから自然と出てくることが多いです。実際に着替えてみるときには，校歌や自分たちが好きな歌を流して，着替え終わった子どもは歌って待っているようにすると，「今日は2番が終わるまでに着替えられるかな。」などと声をかけながら，楽しく早く着替えられるようになります。



きまりを守る必要性を導き出す問いかけを

幼稚園教育要領等で示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」には，「きまり」について右のように書かれています。

幼児教育では，きまりは作ったり守ったりしていたのに，小学校では，きまりはただ守るだけのものになっていないでしょうか。

例えば，「ろうかは歩きましょう」という学校のきまりがあった場合，「きまりだから守りましょう」ではなく，「どうしてかな」と投げかけるだけで，自分たちできまりについて考え，きまりを守る必要性がわかると思います。

> (4) 道徳性・規範意識の芽生え
> 友達と様々な体験を重ねる中で，してよいことや悪いことが分かり，自分の行動を振り返ったり，友達の気持ちに共感したりし，相手の立場に立って行動するようになる。また，きまりを守る必要性が分かり，自分の気持ちを調整し，友達と折り合いを付けながら，きまりをつくったり，守ったりするようになる。（下線は筆者）





スタートカリキュラム終了に向けての子どもたちへの支援や，教師がすべきことは何でしょうか。

「困った子」ではなく「困っている子」

スタートカリキュラムの実施期間は，入学後２週間，１か月，２か月，夏休み前までなど，多様に想定することができます。「期待する児童の姿」を目ざし，１年間を通して，子どもの状況に応じた対応をしていくことが大切です。

スタートカリキュラムの終了期間が近づいても 45 分間の授業に集中できない子どもがいたとします。そのときは，「困った子」でなく「困っている子」と捉えましょう。

右のように，子どもがなぜ今の行動をとったのか，子どもの視点に立って考えてみると支援の方法が見えてくるかもしれません。学年の先生に相談し，一緒に解決するのも一つの方法です。

子どもの視点に立って……

担任の発問があいまいだったのではないか

今日，出がけにおうちの方とけんかしたのではないか

最初だけ担任と一緒にやったら，後は一人でできるのではないか

「手応え」を大切に，次の意欲につなげる

本校のスタートカリキュラムで大切にしているのは，「手応え」です。価値ある体験を通して，子どもたちが気づきや手応えを繰り返し経験することで，次の行動への意欲につながります。これは、学習指導要領の育成すべき資質・能力の三つの柱の一つである「学びに向かう力」を育みます。本校では，スタートカリキュラム以降も，この「手応え」を全学年で大切にしています。

子どもたちは入学直後からさまざまな疑問をもち，それらを解決するために調べたり話し合ったりする活動を繰り返していきます。生活科の学習を中心として，みんなで考えることの楽しさや，みんなと解決できたときの達成感を何度も味わうことができ，その経験が他教科等の学習にもつながっていくのです。

スタートカリキュラムの期間が終わっても，「～をやってみたらいいんじゃない。」「もっと～について考えたい。」といった，子どもの主体的に学び考える姿勢を大切にしていきましょう。



イラスト　熊本奈津子

光村図書

せいかつ探検隊　創刊号　2021年3月31日発行

発行人　吉田直樹
発行所　光村図書出版株式会社　〒141-8675　東京都品川区上大崎2-19-9　TEL.03-3493-2111
URL　www.mitsumura-tosho.co.jp　E-Mail　koho@mitsumura-tosho.co.jp
デザイン　鷹觜麻衣子　表紙イラスト　tupera tupera　印刷所　光村印刷株式会社

本誌は，文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき，（一社）教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」にのっとって配布しております。